

伊勢半本店  
Since 1825

# ミュージアム通信



今様美人拾二景 溪斎英泉

江戸の女性たちの憧れ

## 寒中らし紅

[資料室談議]

『都風俗化粧伝』解説

頭書・白粉をする伝

[伊勢半本店年代記]

「江戸の女性をもっと美しく」

—初代・半右衛門

## 江戸の女性たちの憧れ 寒中らし紅

最高品質の紅で美しく  
江戸女性の真冬美容

プレミアム化粧品や限定化粧品が発売されると、競って購入する平成の世の女性たち。江戸時代もこれと変わらぬ女性の姿があった。

暦の上で「寒」と呼ばれる、一年で最も寒い時期に作られる紅は、色鮮やかで薬効が高く、最高の品質とされていた。特に寒中の「丑(うし)の日」に売られる紅は、「口中の虫を殺す」「唇の荒れを防ぐ」「血をきれいにする」等の薬効が信じられ、女性たちは我先にと紅を買い求めた。寒の丑の日、寒紅と記した赤い旗を掲げて、大売出しを行う紅屋の店先は、朝早くから若い女性で門前市をなしたという。「美しくなりたい」という女性の心は、今も昔も変わらないのである。

## 気温の下がる

### 寒中の丑の刻に製造

なぜ寒の紅は、品質が高かったのだろうか。

その理由は、紅の製法や性質にある。次に挙げるのは、紅の製造五カ条という紅屋の家訓である。

- ① 紅製造ニ先ダチテ垢離沐浴シテ神鏡ニ向フベシ
- ② 製造ハ深夜丑滿時刻ニ於テスル事
- ③ 年中寒水ヲ貯蔵シ製造料ニ供スル事
- ④ 工場内ハハ月事アル婦人ヲ入ル可ラズ
- ⑤ 製造紅ハ黒色漆器ニ容レ穴蔵ニ

## 収ムル事

垢離(こり)は神仏に祈願するため、冷水を浴び身体を清めること。沐浴とは洗髪のことである。良い紅を作るためには、紅職人は身を清め、気温の下がる深夜帯・丑滿時刻(うしみつどき)に、寒水を使って製造しなければならぬとされていたのだ。

発色の良し悪しを問われる染物なども、水温が低いほど鮮やかな色になると言われるが、紅に関



鳥高齋栄昌 郭中美人鏡

しても同じ事が言えるのであろう。また、紅は光や熱に弱い性質であるため、気温の低い寒の時期は、紅の品質を長く保てたとされた。いつまでも替わらで寒の小町紅―と川柳でも詠まれている。

### 女性の心を捉えた

### 紅屋のマーケティング

寒紅が江戸の町で人気を博した理由の裏には、紅屋の巧みな広告戦略があった。

当時、牛の像の、自分の身体の悪いところと同じ部位を撫でると、病気が治るという「撫丑(なでうし)信仰」が広く普及していた。このため牛は健康に結びつく動物として親しまれていた。これを利用して、まず特売日を丑の日に設定。そして、購入金額に応じて、金色か黒色に塗られた牛の置物を景品としてつけるプロモーション

を行なった。さらにこの牛を「赤い座布団に載せ、神棚に供えて拝むと、その一年は着物に不自由しない」という宣伝も同時に、女性たちの心を掴んだのだ。



寒中うし紅のチラシ

品質面においても丑の日の紅は、血行促進作用や殺菌作用などの薬効が高いと、特に強調して宣伝したこともあり、「美と健康」を願う女性たちの間で、大人気となったのである。

さて、次の寒は、二〇〇七年一月六日から二十日

まで。丑の日は、一月十七日。いにしえの女性たちに思いをはせて、この日に紅を点してみてはいかがだろうか。

### 【写真左】

小町紅季ある・寒つばき販売価格一万二六〇〇円 伊勢半本店は、江戸時代より続く日本唯一の紅屋として、寒中うし紅の恒例行事だった牛の景品を復活させ、小町紅に添えて販売中。

期間／二〇〇六年十二月一日から二〇〇七年一月三十一日まで。



『都風俗化粧伝』解説

みやこふうぞくけわいでん

卷之中 第四 化粧之部  
頭書・白粉をする伝



(注)※頭書(かしらがき)  
書物や文書の冒頭に趣旨などを置くこと。  
または書物の本文の上欄に書き込まれた注釈など。

『都風俗化粧伝』は「顔面之部・手足之部・髪之部・化粧之部・恰好之部・容儀之部・身嗜之部」の七部から構成されており、今回はこの「化粧之部」より一部抜粋して解説する。

まずは、なぜ「化粧伝」と書いて「けわいでん」と読むのか、それからお話しよう。昔は「けわい」というと、身嗜み・身繕いといった広義的な意味を持ち、「けしょう」というと顔に施すもの、今でいうメイクに相当する内容を指す狭義的な言葉だった。『都風俗化粧伝』は身嗜み全般を説いた本だったので、「けわいでん」とする必要があったのである。



『都風俗化粧伝』は、文化十(一八一三)年に刊行された化粧書で、上・中・下の三巻から成る。白粉の塗り方や紅の点し方をはじめ、身嗜み全般にわたって美しくするためのテクニクを解説した当時の総合美容本。

さて、今回取り上げるのは、「化粧之部」の頭書部分と「白粉をする伝」の部分である。『都風俗化粧伝』の体裁は、写真からもわかるように上下二段組になっており、頭書は上段にあたる。

頭書には、概ね次のようなことが述べられている。『女が化粧をするのは礼儀である。夫には決して寝起きの素顔など見せてはいけない。早起きして顔も髪もきちんと整えておくべきだ。だが、そうかといって化粧が濃くなっても却っていけない。紅も白粉も自分の顔に似合うように自然な感じに塗るように』

次に下段の「白粉をする伝」である。ここでは次のように書かれている。

『化粧をするにあたって一番大事なのは白粉を溶く段階だ。ここで手を抜いたら美肌は作れないと思え。丁寧に溶いた白粉は、一度に顔に乗せるのではなく、手に少量ずつ取って、額・鼻・口・耳・首の順でよくのばしていくこと。仕上げに少し水で塗らした刷毛で白粉を塗った上を刷けば、さらに白粉はよく伸びて美しく化粧でき』

美容本片手に美しさを探求する女性の姿は、江戸時代にあっても何等変わりがなかったようだ。

# 「江戸の女性をもっと美しく」 —初代・半右衛門



約一八〇年—伊勢半本店が創業時より刻んできた時間である。現在の日本橋小舟町一丁目に、伊勢半本店の創業者・澤田半右衛門が店を構えたのは、文政八（一八二五）年のことだった。

半右衛門は寛政二（一七九〇）年、武州川越の藤間（現埼玉県川越市藤間）

に、農家の次男坊として生まれた。当時この地には、江戸—川越間をつなぐ水運の要所があり、そこは江戸の様々な情報が伝達される、いわば文化の継地点であった。

そのような地に生まれ育った半右衛門が、立志の情熱を胸に江戸に奉公したのは十代半ばだったと伝えられている。奉公先は日本橋油通町（現日本橋大伝馬町三丁目）の紅白粉小間物問屋であった。当時の日本橋界隈といえ、江戸随一の繁華街で、有名な三井越後屋や白木屋といった大店の呉服店をはじめ、様々な店が軒を並べていた。

そんな商業の中心地で、とうとう半右衛門が店を

構えるに至ったのは、二十余年の歳月を経た三十六の時だった。その際、伊勢屋という呉服屋から株を購入したため、店名は「伊勢屋半右衛門」、屋号で「伊勢半」と呼ばれるようになったのである。

江戸時代中期以降、化粧の習慣が庶民にまで広がり、女性たちの美への関心は一段と高まった。そうした背景もあって、半右衛門は江戸の女性をより美しくすべく、日夜化粧用の紅の研究に勤しんだのであった。当時の紅は製造も販売も京都が主だったが、半右衛門の努力の末、ついには京都製に劣らぬ品質の江戸製紅を作り出すに至ったのである。

## Information

## かわら版

### 企画展のご案内

「江戸の化粧美」～美は赤・白・黒でつくられた～

2007年2月1日（木）～3月31日（土） 入場無料

化粧文化が大いなる発展をみせた江戸時代、女性たちは紅・白粉・墨で美をつくりだすことに工夫を凝らしました。化粧術・化粧の常識・流行などを「赤・白・黒」のゾーンに分けて、浮世絵や美容専門書、化粧道具類の展示を通して解説します。



### サロンイベントのご案内

■紅で華やか卒業メイク袴に映える紅化粧—  
2007年2月24日（土）

■「紅・白粉・墨を使った江戸の化粧を再現」  
2007年3月17日（土）

※内容・申込詳細は、ホームページに掲載いたします。

Since 1825

伊勢半本店



ミュージアムのご案内

●開館時間／午前11時～午後7時 ●休館日／毎週月曜日 ●入場無料  
（月曜日が祝日または振替休日の場合は、翌日が休館日となります）

東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F TEL&FAX:03-5467-3735  
東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」下車B1出口より徒歩12分

<http://www.isehan.co.jp>